

# コミュニケーションの脱神秘化

J・W・ハイジック  
James W. HEISIG

I

私がここで取り上げるテーマの本筋とは一見関係のない道から進みたいと思います。学生時代よりここにいる多くの方が親しんでいらっしゃるに違いない、ホメロスの『オデュッセイア』の一場面から始めます。

オデュッセウスは20年間にわたる旅行や冒険を経て故郷のイタケ島に帰ってきます。山羊飼いまランティオスはその元の主人である彼と道で出会いますが、彼がオデュッセウスであるとは気づきません。ただの汚い乞食と思って、彼を乱暴な言葉でののしり、腰の辺りを蹴つとばします。それからオデュッセウスは自分の家には行って驚きます。中庭には歌ったり踊ったり飲んだりしながら、妻に求婚している男たちが大勢いるのです。だれひとりとしてオデュッセウスを見知っているものはいませんでした。そんな中、片隅に横になっていた、年老いた獵犬アルゴスが突然眠りからさめて立ち上がります。昔の飼い主の存在に気づき尻尾を振ろうとしてアルゴスは力尽きます。古い友の姿を見てオデュッセウスは流れる涙をぬぐいます。

そのうちに、妻のペネロペアは騒ぎを知り、ひどい目にあったそのみじめな旅人を自分のところに呼び寄せてやさしくくつろがせました。長年、いやらしい求婚者たちを寄せ付けもせず、愛する夫が死んだというわさを拒み、いつの日にか帰ってくると信じてきたペネロペアは、その赤の他人とみなした旅人にオデュッセウスについての便りをたずねます。オデュッセウスは第三者として自分のことについていろいろ話し、主人がもう帰途についていることを伝え、安心させようとします。喜びの涙にあふれたペネロペアは、夫の乳母エウリュクレヤに旅人の足を洗うよう頼みます。

その老婆が彼の足を手にしたまさにそのとき、ものいわんとした彼女の声がとぎれまです。彼のひざをつかんでいうには、「間違いなくあなたはオデュッセウスさまですね、大切な若様。わたくしとしたことが、殿様のお体にすっかり触れてみるまでは、それと気がきませんなんだ。<sup>1</sup>」

なぜ『オデュッセイア』の閉幕に近いこの場面から始めたかということ、ここにコミュニケーションの見落とされてきた側面がよく表されているからです。考えてみると、家中の人々は、彼のことを愛する妻も含めみんながオデュッセウスを見たのですが、しかし、彼を覚えていたのは犬と乳母のみでした。それらはどうして見分けることができたのでしょうか。オデュッセウスが言葉で伝えた内容に気づいたからではなくて、むしろ言葉なき、あるいは言葉の裏から、言外の何らかが伝わったからです。この「裏」とか「外」とかが、私がここで名づけているコミュニケーションの「神秘」に属するのです。「属する」といっても、それはこの神秘性がたんなるコミュニケーションのアクセサリー、あってもなくてもよいという付属品ではなく、その必須要素であるということの意味するのです。何ものかを言葉で言わんとするなら、そこに神秘の側面が必ずや含まれるのでなければ十全な人間のコミュニケーションとはいえないのです。「神秘」というと、それは普通の意識以上の超意識的な状態で、ある特定の意味内容が心から心へ伝達される状態を想像するかもしれませんが、そうではありません。むしろ「神秘」とは先ほど挙げた例のように、犬がその飼い主の存在を感じるような、あるいは老婆がその人のひざを触ってこれは自分が若かりし頃に乳を飲ませた赤ん坊だと思ひ出すような程度のごく平凡で、意

味内容とまず関係のない経験に過ぎないのです。ここで論じる余地はありませんが、実際に「神秘状態」やいわゆる「より以上の意識状態」とそれらを伴う宗教的体験を定義する要素はこういった平凡な経験にも見られると思います。

いかにこういった神秘性がわれわれのコミュニケーションにしみ透っているとしても、やはり「神秘性」そのものがはっきりとは捉えがたいものであり、比喩を用いる以外の表現方法をもたないため、コミュニケーション論に当てはめがたいということはいうまでもありません。普通、コミュニケーションとは、AさんがBさんにCをDでもって伝達するという形式で考えられます。たとえば、「私(A)があなた(B)に自分の気持ち(C)を手紙で(D)書きました」というものです。何らかの誤解が生じた時、その原因をこれらのA B C Dのいずれに負わせればよいという意味では、この形式でコミュニケーションをとらえるのは便利だといえるでしょう。

しかしなぜ犬や乳母だけがオデュッセウスを覚えていたのかと問うと、この形式で問題を問うことは意味をなさなくなるのです。ある主体が他の主体に何らかの具体的なメッセージを伝えるという考え方は的外れになります。しかもある気持ちが人から人へ伝えられたという考え方も適当ではありません。もっとも気持ちということばを使うなら、それは一者が他者に対して持っている気持ちというのではなく、ある者たちをとらえて離さないけれども、他の者は気づきもしない、けれどもその場にはたらいっている気持ちです。伝えられている内容、それはつかの間の、まぎれもない、うっとりとしたさまのような雰囲気です。話がだんだんと奇抜になってきたように聞こえる

かもしれませんが、くり返して主張します。それこそもっとも普通で、直接的なコミュニケーションより一層普遍的なコミュニケーションなのです。まさにそのために神秘的であり、言葉で把握するのが困難なのです。

見ても覚えていないという文句における「おぼえ」とは何なのでしょう。ただ単に思い出すのとも異なり、そもそも主体が行う行為ではありません。「覚える」とは記憶、信用、思われること、学ばれること、感じることなどを包括する「めざめ覚」のことであり、合理的な説明も、言語的表現でさえも拒否する概念なのです。自が他にかわって目覚めることはできないばかりか、この雰囲気巻き込まれていない他者には伝達できる内容もない「覚書不可の覚」です。その上で、アルゴスが人間よりも先にオデュッセウスを見知ったことからすれば、「言葉の裏から、言葉を超えた」雰囲気を「おぼえ」とは、われわれと動物を区別する知識というよりは、動物的意識にちかいものであるといえるでしょう。その意味で人間の場合も、十全なコミュニケーションには動物的はたらきが必須であると認めざるを得ません。

これに関連して鶴見俊輔は昔の本を手にとることについてこう書いています。

においから過去をたぐりよせる、というのが、動物としてのまっすぐな方法だろう。風景、というよりも自分のいた場所の感じがまず心にうかび、それに託した自分の思いがもどってくるということもある<sup>2</sup>。

動物と同様に、われわれを別な世界にみちびくこの「匂い」は外の、客観的な風景にあるものではありません。それはむしろ風景の裏から、それに身をさらす者のみに

呼びかけるのです。鶴見の場合、それは文書の行間に吹く風によって読者に運ばれ、ホメロスの場合には、これはぼろを着た旅人の姿からのかすかな「あらわれ」としてアルゴスや乳母に届きます。

「匂い」を語ればただちに芸能を咲くから散る道理への花の諸相にたとえる能の大成者世阿弥を思い出します。能は、演劇者がその役柄を内部から習い、その時その時の花になりきることを要求します。あくまでも「花」は心のものであり、演劇のわざは花のたね種に過ぎないのです。ですからたとえば、上手な演者が「曲」の基本の節の奥にある曲をこころえることのみによって、曲の「匂い」が声をこえて舞いにうつることができるのです<sup>3</sup>。さらに演者がその匂いを観客に伝え、「花は、見る人の心に珍しきが、花なり」、その結果、あらたな風情が生じるようになります。世阿弥は随所で「花は心、匂いは風情」といっています。

それから五百年あまりの月日がたった今でも、世阿弥の花のたとえがいきいきと演劇の神秘性を優雅にこころえていたことは否定できないでしょう。しかしながら、世阿弥の例からもよくわかったように、その神秘は劇の演劇に特殊な成分ではなく、かえって芸能が特殊な形を与える一般の「伝心」の中で行われるのです。匂いのようにうつる「風情」は、風景の裏にあり、オデュッセウスの犬や乳母をたぐりよせるのです。われわれがこのような経験に逢うときは、「雰囲気」が漂うという以上に漠然としかわからない気がします。こういった風情は、われわれが作るのではなく、ずっとそこにあったことに目覚めることにより知るものなのです。あたかも笛を口にしている者がひとが意識せずに呼吸している同じ空気を音楽に変化させるかのように、形なきもの

に形を見るということを感じます。雰囲気につかまるということは超感覚的な状態に入るところか、普通の感覚に根付いた経験なのです。感覚を超越したものというより高度な感覚といったほうがよいでしょう。匂いとは、普通の意味で「何か」を伝えるものではありません。ただ風情に目覚めるように、風情に巻き込まれるように個人を招くのです。花の上を通った風が運ぶ微妙な匂いにもまさるこの神秘はいかなるコミュニケーションの「技」をもっても伝えられません。バックに流れる音楽の高まり、照明の調整、カメラの角度、巧みなせりふ回しによって伝えられる雰囲気とは異なります。しかしこういったコミュニケーションの技術は神秘をその内に回収してしまい、やがてわれわれを神秘性に対して鈍感にさせることはできます。こういった鈍感是我がここで問題にしたいコミュニケーションの神秘的側面の価値低下にほかなりません。

11

私が今まであいまいなことばで話してきた内容について、おそらくそれに頷かれるところがあるでしょう。コミュニケーションの「神秘」とはいったものの、それは超能力者の権利ではなく、だれにとっても身近な体験が思い起こされると思います。つまり何かに、誰かに対して漠然とした気持ちが襲い、予想もしなかった「共感」が胸を横切るような体験はきっと珍しくもないのです。決して何もコミュニケーションされていないとはいえません。しかしまた何が伝わってきたと断じることができません。たった一つの素速い目くばせ、かすかな手ざわり、ぼんやりした音などで感じたことをいい表そうとするとき、普通のことば遣いは見出せないのです。しかもこういった体

験は人間や動物に対してのみ生じるわけではありません。他にも古い家の壁になんとなく記録された秘密、花や木の小声、星空とか海のざわめき、夢の中の神託のような耳打ち等々があります。

ところが、このような少しばかりのぞいただけの伝心はいくら現実的であっても、コミュニケーションの神秘を定義することに、またその脱神秘化を問題にすることにあまり役に立ちません。こういった体験は自己閉鎖的で、一期一会のものであり、一般化するにはあまりに私的なのです。これに関連してC・G・ユングが宗教的経験についてこう発言しています。

宗教的経験は絶対的なものです。それは論議の余地がありません。ひとがただ言えることは、自分にはそのような経験がないということだけであり、それにたいして、反対者は、「あいにく、私たちにはそのような経験があります」と言うでしょう。そしてそこで、議論は終わりになるでしょう<sup>4</sup>。

宗教的体験のみならず、あらゆるコミュニケーションにおいても同じことがいえる側面があると認めざるをえません。「言葉の裏から、言葉を超えた」ものを一層わかりやすくするために、「匂い」のおぼえがないミスコミュニケーションを例に考えてみたいと思います。

何か一ついいたいのだが全く意図はずれの別なことが伝わる場合があります。あるいはかくしたいのだがかくしきれない思いを相手にはわざと口をすべらせてしまったかのように吐露する、というような日常的な経験には必ずといっていいほどのコミュニケーションの失敗があります。雑談の中でも、複数の人々が同じ言葉を聴きますが、それぞれにはまるで違った意味内容が記憶

に残ります。そしてこのミスコミュニケーションが頭を悩ますのです。ペネロペアがオデュッセウスの話を耳で聞きながらも、愛する夫の声を聞き分けられないのに、中庭の犬がたちまちにその飼い主への覚えを蘇らせるという物語を読む人の苛立ちと同じように。その苛立ちをいましばらく念頭に置いて、コミュニケーションの全体性を考えてみましょう。

先ほど話したように、人と人との間のあらゆる伝達には、成功したか失敗したか、表現をうまく選択されたか乱暴な口をきいたか、相手と同じ前提を持つか持たないかを問わず、伝達不可能な面があります。フランスの実存主義者アルベール・カミュが自殺についてのエッセイのなかで、失敗したコミュニケーションを目撃した時のことを語っています。彼はいらいらして悲観な結論にいたります。

硝子の壁の向こうで一人の人間が電話で話している。その声は聞こえないが無意味な身振りが見える。なぜ彼は生きているのかと人は自問するのだ<sup>5</sup>。

場面が手に取るように目に浮かぶでしょう。皆様は、すくなくとも携帯電話が普及する前に、二つの挫折を知ったことがあるに違いありません。まず、受話器を通しての会話では相手に真意が通じなかったという挫折、また自分が電話を使いたいの先に使っている者がなかなか通話を終わらせてくれないという時に感じる挫折です。ところが、カミュのように考えを飛躍させた人はいないと思います。だれにもいらいらしているときには皮肉っぽい考えが浮かび上がることがあるかもしれませんが、人生そのものに対しての厭世的な態度まで徹底することは…。もしわれわれ人間の話し合いがつねにこのような誤解に陥る運命にあ

るのだとすれば、われわれはなぜ生きているのでしょうか。もしわれわれのだれもが、やっとのこと言いたいことを言えないとすれば、言語という才能は、結局、残酷なのろいに過ぎないではないか。

そこまで進む前に、カミュが描いた場面に立ち止まって、彼のイメージをもう少し発展させてみましょう。まず電話が空くの待っている人の立場をとってみましょう。ガラスのしきりのうしろにいる男が何かに八つ当たりしているのが見えますが、何のために当惑しているかは見当もつきません。そこで私は片耳をガラスのしきりに押し付けてかれの話していることを聴こうとします。彼の姿は見えなくなりますが、その言葉はよく聞こえるようになります。まもなく、妻に話していることがわかります。空港のタクシーの運転手がストライキ中で、時間も遅くてバスも走っていないので、早く迎えにきてくれと頼んでいるようです。若い女性の事務員が同じ飛行機に乗っていたのは偶然だったし、その後の一週間ずっと会っていないくて、浮気なんてしていない、何を嫉妬しているのか、うちに帰ってからゆっくり話そう、とにかく車で迎えにきてくれ、云々と話している。

私はやっとなかと思ったと思って、ガラスの仕切りから離れて、その人の言葉ではなく、再び彼の乱れた身振りに目を移します。もう今は彼の身振りが無意味と考えません。実際に私も彼の妻も言葉だけで把握できないことを表現しているとわかります。話すことによる伝達には、言葉だけに注意すると通じない、もう一つのメッセージがあります。つまり、話し足りない、言葉を越えたものがあるのです。言葉を知らない、揺り籠のなかで泣いたり、手足を振りまわしたりしている赤ちゃんのごとく、言葉とい

う器を満ち溢れる気持ちのあまり、彼は限界状態に陥っています。彼の身振りはたとえその「言葉を越えたもの」の意味内容を伝えかねても、その現実自体を表象しています。われわれのあらゆるコミュニケーションには単に表現できる言葉では計りきれない面があり、しかもその面は赤ちゃんが欲する乳か親の抱っこと同じように大切なのです。

しかし電話ボックスの中の男の場合は、そんなに簡単ではありません。妻の疑惑を治めることができる言葉が見つからないだけではありません。彼女に彼の誠意の「匂い」が感じられないという挫折もあります。妻は彼の言葉が届けない別な風情につかまっています。多分妻の疑いには根拠があって、彼女も同じように乱れた身振りで話しているかも知れません。とにかく、あの二人の「波長」が合っていないことは、コミュニケーションの神秘的側面の欠如による苛立ちからその側面の重要性を自覚できることを示しています。

普通のコミュニケーションにおいて共にはたらいっている要素を区別するのに、カミュのイメージは有益です。人は人に対して身振りなしに話すことができませんが、多くの場合には言葉と身振りの区別を気にしないでコミュニケーションが行われます。もっとも冷静な構えで客観的な事実を意識主体から意識主体へ伝えるときでさえ、その身振りが欠かせません。それを重視するにせよ、無視するにせよ、人間のロゴスには言語に訳せないミュトスの側面がいつも含まれています。

この主張は皆様にとって新しくもないし、別に深い意義を持っていないと思います。が、コミュニケーション論の衣をまとわず、事実そのものをそのまま語ってみると、カ

ミュの結論とは違った道が開かれます。人と人との話し合いにおいては身振りが無視され、またその身振りが注釈している「文書」(場合によって逆になります)から切り離され、あるいは単に荒唐無稽とみなされている場合は、その通話の意味内容は、不完全であり、最終的には無意味になってしまいます。カミュが考えるように、言葉と身振りとがかみ合わないことは確かに人間には避けられないことであり、多分われわれがもっとも「成功した」と思うコミュニケーションをも汚染して、私は真にいいたいことを言えないし、あなたが言いたいことを真に把握できないかもしれない、という不安定な状態に人をおいてしまいかねません。にもかかわらず、われわれは話し合いのミュトスの面、「言葉の裏、言葉を越えた」ものを自覚している 時として深く自覚している という事実を愚にもつかない暴論と思ってはなりません。身振りやミュトスという概念はただ伝えたいけれども伝えきれないもの、どうしても言葉で表現できない感情とか直感の残物を指さすのではありません。身振りやミュトスはそれ以上に、われわれにとってはコミュニケーションの私的で個人的な意味内容が自分と相手を巻き込んでいる「雰囲気」に目覚めるところに視野を開く、あるいはその雰囲気の欠如のために身振りがその役割を果たせない事実が目覚めさせるものです。私にとっては、人はわれわれのあらゆるコミュニケーションに神秘的要素がはたらいっているということをどれほど自覚しているのか、そしてその意識が拡大しつつあるかそれとも縮小しているのか、またその結果われわれの人生の質にたいしてどのような役割を果たしているのかということが一層重要な問題として浮かび上がってきます。

人間の状態に対する全般的な絶望から焦点を変えて、言下に秘めていることに耳を傾ける能力のある範囲に注目すると、コミュが問題にしない質問が際立つようになります。すなわち、コミュニケーションの十全性を疎んじているとして、それはただ単に個人の意思か才能か努力の欠如のせいではないとしたらどうでしょう。現代人のコミュニケーションの能力が、いわゆる「先進国」で生活を送るというだけで人と人との間に押し付けられる障壁があり、そのために衰退しているとしたらどうでしょう。そして言葉から身振りを、ロゴスからミュトスを切り離すその障壁がガラスのように透明であって、破壊できないほど強固であったらどうでしょう。もしそうならば、その障壁にペンキを塗って見えるようにするだけではなく、それをどうやって取り外すかということを実際に考えるべきだと思います。

### III

最近、大江健三郎は日本の外国人記者クラブでの講演の中で日本の文学文化が危機に陥っていると訴えました。行間に注意を払う読者がますます少なくなってしまうことにつれて、それらの読者の好みに迎合した結果、表面的な本やエッセーの数が劇的に増えているからです。日本語の文書が次第に会話調になっていると同時に、会話そのものは次第に早口で、意味内容の薄いいい加減なものになっている傾向があると論じました<sup>6</sup>。

これはかなり大雑把な概括ですが、語り手がノーベル賞受賞者で、非凡な作家であることを忘れてはいけません。大江の言葉は日本の現状に向けられたものですが、その講演が英語で行われたことは意味がある

と思います。彼の目的はきっと日本人を外国の前で貶めることではありませんでした。かえって、科学・技術的な「先進国」一般がかかっている文化的疫病を前に、日本もそれから逃れられない運命にあると示唆しようとしているのだと思います。その病は日本でどのような形で現れるかということは第一の問題にしていません。それは言うまでもなくその特定の社会と同じように独自の形で顕在化するに疑いありません。しかし、どれが一層独自であるか、その独自性ゆえにそれが日本独特の問題であるか、などについてこだわらず、それらの懸念をはるかに乗り越えた視点からみえる共通点を強調しています。すなわち、コミュニケーションの技術がもっとも進歩している国々においてこそ伝達の深みをもっとも退歩しつつあるというのです。

大江がいうように会話と文書との隔たりがなくなり、文書の乏しさがさらに乏しい会話の状態を反映しているとすれば、文学の改善が事の本質をつかむことにつながっていく可能性は少ないでしょう。確かに会話が文書をしのいでいるのではなく、ただ会話が表面的になればなるほど文書をも弱めていくのです。重要な意味で、書き言葉はつねに話し言葉を追いかけようと奮闘しています。まさにそのために行間を重視すべきなのです。なぜなら、文書はほのかな示唆しかできないのにたいし、対人の対話におけるコミュニケーションはより豊かであるからです。話し言葉は柔軟性に富みますが、書き言葉は法則に縛られていることがおおいのです。身振りが伝わったかどうかは書き言葉と比べて話し言葉においてより明らかで、読者の知育や作家の才能とは関係がありません。会話は自発的で、未編集的ですので、作家がいくら言葉を用心深

く選んだり、文書を磨いたりしても、会話の伝達の失敗をなくすことはできません。大江が認めているように、逆に書き言葉が話し言葉の先例を追い、行間で伝達すべき微妙な内容、神秘、ニュアンスが、それが存在しがたい、文字の表面に浮かび上がっていく可能性が十分あります。

話し言葉の弱体化によって生じる結果はそこで止まりません。身振りがコミュニケーションに貢献する深みが衰えるにつれて、身振りが差す背後にある神秘にたいする自覚も衰えていきます。コミュニケーションが阻害されていくかぎり、ロゴスをこえたものに巻き込まれている「匂い」の価値が低下して、その阻害を促したりそれを益にしたりする価値観が、残っている空を満たしていきます。やはり流行と折り合っていくことは神話や身振りを強化する人生の側面の破滅を意味します。流行はそもそも音、イメージ、感傷の合理化であり、それらのもののロゴスからの解放を妨げるのです。商品の消費やサービスの利用にたいする価値が高くなればなるほど、消費できないもの、専門家によって保証されないものの価値は減じられます。コミュニケーションの神秘的側面への留意は他の何にもまして早くその傾向の犠牲となります。公的にせよ私的にせよ、情報交換の道具はコミュニケーションの神秘を計りかね、そして計りかねるものの価値を減じます。われわれの人生がこういった道具に頼るにつれ、それらに期待していることとは正反対の結果がおおくなっていきます。意識の拡大に代わって意識のしぼみが経験されて行くのです。大江は言語の無意味について不安を感じていますが、彼の読者の多くは恐らく何が心配なのかといぶかしがるでしょう。

もしこのような意識の病理が単に個人の

性格の弱さに由来するであれば、何らかの形での教育革命に救いを期待できるかもしれませんが。しかしもしそれがイヴァン・イリッチが指摘するように、われわれの現代世界に携わっている人間性の「脱価値化<sup>7</sup>」であるとすると、われわれの自由を奪っている社会制度を脱構築し、場合によっては取り除くだけで問題が解決できます。このような発言はごくロマンチックで、アナキズムへの招待に過ぎないと思われるでしょう。誰にとっても情報ネットワークや娯楽の産業界から身を引き離し、いわんやその制度全体を撤去することはとても考えられないことでしょう。とはいうものの、私が思うにコミュニケーションの神秘を評価する立場からして、コミュニケーションの脱神秘化こそがよりロマンチック、よりアナキズムに近い傾向なのです。もう少し考えて見ましょう。

会話や文書における身振りの面、つまりコミュニケーションの神秘的匂いに注意を払わなくなるのは、「現実の世界」へのアクセスを妨害するあらゆる過去の迷信からわれわれを自由にする「非神話化」にかこつけて問題になりません。「神秘的」なものを「現実的」なものに取り代えることによって、「言葉の裏、言葉を越える」ものの価値は言葉の表面に移されます。残る神秘性はしたがって理解の不足とみなされます。なくなった神秘の魅力に対する名残は仮想を現実にするバーチャル・リアリティーに蘇っています。その境界線以内の世界は徹底的に非神話化され、合理化されているのですが、同時に十全な人間的コミュニケーションの感傷を現実離れな形で守ろうとするので、純粋なロマンチックな世界となります。しかもこの仮想的現実がコミュニケーションの本来の姿 ( arche ) に取って代わる限り、

もとの意味でのanarchia と呼ばれるでしょう。わずか一世代前に現実からの逸脱として批判されていたゲームや娯楽や性的ファンタジーはあっという間に仮想の世界に再生され、意識のしほみを自覚から制止する一つの産業になってしまいました。

人生の神秘をロマンチックなアナーキズムに移動するバーチャルスペースは、ジョージ・スタイナーの呼ぶ、人生が次第に引越していく「第二次の都会」を思い起こさせます。その都会においては人々が食べたり、飲んだり、互いに抱き合ったりするかわりに、食べもの、飲み物、性的行為についてしゃべることだけで満足します<sup>8</sup>。よりバーチャルな娯楽で満足するようになるのです。余談ですが、バーチャルスペースにおかれた現代人は、死んで二つのドアの前に立ったとき、その一つには「天国」、もう一つには「天国のビデオ・ゲーム」が書かれてあるとすれば、その大多数は後者を選ぶのではないかという気がします。

私個人としてはこのプロセスを25年間以上に渡って日本国内から目撃してきました。青年時代に住んでいた西洋の諸国でも、似たようなプロセスを目撃したかもしれませんが、その世界についてもはや自信を持って語ることはできません。日本の代表的な思想家である鶴見俊輔の論文からあらためて引用させていただきます。アメリカ式のコミュニケーションと日本式のコミュニケーションとを比較してこう書いています。

アメリカ型のコミュニケーションの基底部には、広告がある。日本型コミュニケーションにおいては、広告は、ごくわずかに大衆小説、流行歌、漫才などに滲透し得たにすぎず、政治、科学、文学からは遠い場所にある。日本のコミュニケーションの諸領域を全体として考える場

合、それらのやしないとなり、ささえとなり、それらの特徴づけているのは、家族内のやりとりである。もっとも日本的といわれる諸様式、俳句、和歌、私小説、生活態度、生花、盆栽、茶の湯などは、すべて、それらが家の中でおこなわれる「あれをちょっと……」式の寡黙な以心伝心的コミュニケーションを原型として派生した、といういみで同根的である。日本の近代化のさせえとなった官僚の言語、科学の言語は、勅語の言語との縁をたつことができず、おなじ家族主義を制度化してもっとひろい場に適用したものである<sup>9</sup>。

鶴見の文章はなじみの深いものですが、ただしナツメロのようです。それは、前世紀の半ばごろに書いたものと考えれば驚くべきものではありません。アメリカ社会の原型と日本社会の原型との対照が風変わりでおもしろく聞こえる主な理由は、両社会の公的領域が以心伝心型のコミュニケーションと正反対な方向に行き、次第に近づいてきたからです。現代日本において家の中の生活と皇室の発言は、コミュニケーションの模範としていよいよ無力となってきたと同時に、二十世紀の五十年代型の広告が今にして思えば魅力なしに、信じられないほど素朴となってしまったのです。息もつけないほどの早さで時代は変化し、注意力が散漫になりやすくなるにつれて、商品やサービスの受動的消費・消耗は、両社会をほぼ同じ程度にそこない、家庭内の伝統的価値観を傍観に移し、その文化的影響を弱めつつあります。

当然、もっとも普通の楽しみもこの歩調の変化から逃れられるわけではありません。すばらしい食事の前にすわって、わずか数分がたたないうちに話が別の食事、最近開店した別のレストランなどに移り、目下の

ご馳走を忘れるほど楽しめます。あるいは、秋晴れの空の下で美しい紅葉の景色の前に立って、あたかもその驚異の念に溺れることを恐れるかのように、間もなく夏の花が満開になる時とか一面の雪になる冬の時とかについて話します。われわれは、日々、人工照明の下で生活し、何時間かを画像のイメージに目を向けて過ごします。サングラスをかけないと天然の光に肉眼が堪えない状態は普通となってきています。大急ぎで変化する世界にファウスト的にしがみつこうとすることで、われわれは一種のメフィストフェレス、すなわち *μη φωτοφίλος* = もはや光を愛せない連中になっているのです。

コミュニケーションの神秘なしに生きることは出来ないわれわれは、その神秘的側面の価値低下、不信、特定の保存地への追放という状況に耐えて生きることには慣れてきたようです。個々の人生、社会のありかたに影響を与える日常の判断の多くは、抑えることのできないその神秘性に対する恥とさえ言えると感じるようになりつつあります。償いを得ようとしては、伝統的芸術や慣習をパック化し、そのために設立されているオアシスに時間をすごして、そのようにしてよその世界、よその文化と異なる価値観を保っている、と考えるのは自己欺瞞にすぎないのです。

この現代の状態には深い皮肉があります。一方で、生きることについてのおしゃべりや世間話や受動的で身代わりの間接的体験のあまりで、生きているというもっとも単純で明白な事実を紛らす。他方、個人の人生を形成する決断のもっとも信頼できる原料として私心のない、公平な、解釈抜きにデータに忠誠を誓います。その結果目下の世界の手触り、あの年取った獵犬アルゴス

のきゅうかく嗅覚が失われていきます。われわれの話が脱神秘化されることによって、神秘性が寡言になりつつあります。コミュニケーションの水準を決めるのはミスコミュニケーションであり、ロゴスとミュトスの結合が現実的な価値のあるものに対して単なる狂言のようにわきへ向けられています。現実が色あせた、気の抜けたゴースト・タウンとなるうちに現実のイメージは一日一日よりエキサイティングになっていきます。

#### IV

ここで、私が生活の質・人生の質の低下の原因は現代人のコミュニケーションが取るに足らなくなる傾向にあると主張していないことは明らかであると思います。言いたいことはむしろコミュニケーションの表面化はより広い文化的衰退の病を示しているということです。皆様の中にはこういった態度が自分の経験にかみ合うかどうか疑問を抱いている方もいるかもしれませんが。きっと大江の下した辛口の判断にもかかわらず、「行間を読む」のはそんなに珍しくなく、しかも日本は西欧の社会と比べてまだよいほうではないかと思われるでしょう。コミュニケーションの種々の形を考えれば、それが実際にどれほど衰退しているというのか。先進国も含めてあらゆる社会において、人々がいつも「建前」の裏にある「本音」を読み取らなければならないということは否定できないのではないか。気が合うか合わないかということに対する自覚、一目惚れしてしまう経験、自然に対する驚異は現代社会からなくなったとはいえないか。(ならば、いわゆる娯楽産業の世界がバーチャル・リアリティーを売り出す根拠はないのではないか。) 次から次へと疑問がわくで

しょう。コミュニケーションの神秘的側面が消滅する前に危機的な闘があるとしたら、現代社会に生きているだけでどれほど頻繁にその闘を踏み越えているのか。何が過度であるのか。云々という疑問。それでいいと思います。脱神秘化を各自の問題としてみなさなければ、ここに並べた批判はわれわれの考え方に影響を及ぼす可能性は少ないと思います。

まず、現代のコミュニケーションの神秘的側面の価値を低下させる傾向　いわゆる「脱神秘化」　は、その神秘性を日常生活の中で見失うということと区別しなければなりません。既に指摘したように、ロゴスとミュトスとの物別れはつねづねあることです。その現象はとりわけ外国語でしゃべるときにわかります。人の言葉遣いのうまさ、普通の言い方の字引から把握できないニュアンス、ネイティブ・スピーカーの心にこだまする単語の共有的歴史や連想の欠如などのために意味をこころえていない言い方をしてしまうというような経験はよくあります。おなじように、外国語圏の人と会話するとき、自分が伝達した身振りがどれほど言葉とともに通じているのか疑問に思うこともあります。しかも、特定の国語が外来語を取りいれるときにも似たような言葉の深みの紛失があるでしょう。ある単語のより広い波紋を無視してその表面的な意味だけで利用すると、場合によってその単語の本来の国語をネイティブとしてわかる人にとって、わかりかねる意味になってしまうこともあります。ラテン語やカタラン語から現代の英語までのリングア・フランカはみんなこういったように外来語を吸収しながら普及しました。そしてタガログ、パハサなどの多国語の環境の中で活性化する言語も同様です。一言語的文化の

中での非常に地方的な国語の場合も、日本語はその一例ですが　多国語の世界に開かれれば開かれるほど、自分なりに外来語を受け入れていくものです。

今いった現象はここで話になるコミュニケーションの脱神秘化とは違います。どちらかといいますと、身振り、ミュトス、神秘性を含む十全なコミュニケーションをより明白にする、ごく普通のミスコミュニケーションに過ぎません。失敗であったと意識されていない特定のコミュニケーションの失敗とも、またはオデュッセウスの僕やベネロペアとその求婚者のように、ある状況の「匂い」をつかまない特定な場合とも異なります。それらの例も普通です。というのは、すべてのミスコミュニケーションが必ずしも神秘的側面そのものに対する自覚を弱体化するものではありません。問題はむしろ、コミュニケーションが十全に行われるはずの場合、その十全性をそこない、その意味内容を取るに足らないものにする、ということに対するわれわれの忍耐の限界を緩めて、神秘性が意識から暗くなっていくことを黙認するような、文化的習慣があるのではないかというところにあります。こういった忍耐が疫病のように流行ると、なぜ当たり前ようになってしまったのかと自問しなければなりません。

意図的にコミュニケーションの神秘的側面の価値を否定する者はいうまでもなく少ないと思います。普通のパターンは、「神秘性」を全て公的自己にとって意味も機能もない私的個人の内的な領域に隔離してしまうといったものです。頭のさえた、理詰め的心構えを要求する判断　たとえば、財務調整、専門教育、就職や立身出世、そして公的自己とのかかわりのあるほとんどのことに対して、神秘、匂い、身振り、ミュトス

等を導入するのはほぼ病的だと思われます。実際にそうしないように気を配ることが多いでしょう。コミュニケーションや人間関係全体に現れる種々な「霊性的」要素は全体として公的生活の妨げともなる「個人の好み」とか「個人の趣味」とひとまとめにされていきます。

さて、公的自己の重要性や価値が高まるにつれて、私的自己が実際にはたらいっている価値観から退場し、同時に私的自己の価値をやしなう文化さえもますます人生の諸判断から片付けられていくようになります。合理的な公的領域がひろがり、いよいよ現代の生活を包括していくとともに、「言葉の裏、言葉を超えた」ものが露わになる領域が次第に生活から外されていくのです。これは私的感情や好みもう有力ではないということの意味しません。逆なのです。ただ、公的領域が「現実世界」においてその力の具体的価値を否定したり、その力をファンタジーの世界に流したりすることによって私的領域に対して自己防衛すればするほど、その力が支配している思想の形態を批判する傾向が軽減されていきます。このようにして生きがいのある労働を、産業の機械化のためにその人間らしさを犠牲にする「進歩」は、人間の内面性を収容する「私的」、「個人的」と呼ばれる仮想領域の設立によって強化されます。

問題はわれわれが時代の神話の渦にとられていることではなく、むしろ真に信じている価値とただ単に信じさせられている価値とを区別することが次第にできなくなってしまうところにあります。コミュニケーションの脱神秘化はその例の一つに過ぎませんが、重要な例です。意識のもっとも尊い才能は、私が思うに、感情や思想のやり取りであるとすれば、そのやり取りにおい

て支配、理解できない側面を軽視すればするほど、その才能を浪費しています。たとえば、コンピュータ翻訳の技術を追及するうちに、言語の裏、言語を超えた、行間に活けるものが「失われたデータ」になります。コンピュータにはそのものを完全に取り戻す機能がないので、それは忘れられやすいのです。象徴的なたとえです。対人の会話がメディアに媒介される限り、何が「十全」なコミュニケーションなのかを決める基準が、無意識的にメディアにゆだねられます。その結果、身振りをよみ、行間の匂いを自覚していないことよりも、最近の技術を手にしないのが一層不利とみなされます。

われわれは日々聴いている言葉 テレビで、人の前で、携帯電話の画面でのいずれにしても を振り返って考えると、もちろん身振りに注意して聞いています。われわれが身体でもって言葉を使うかぎり、しぐさ、声の調べ、言い方、レトリックの種々な工夫等々に注意しないことはまず不可能です。けれども、伝達された内容の価値を部分的に低下できます。「消毒」や「化粧」に類似して、電話、電子メール、チャットルームのようなフィルターでもってコミュニケーションの匂いを薄くしたり、取り除いたりすることが当たり前となりました。相手が目の前にいるのか、携帯の画像にいるのか、どちらが十全なコミュニケーションであるのか判別しがたくなります。もっとも身体的と思われるセックスもだんだん、脱身体的、非人格的な形で満足する人の数は増加しています。コミュニケーションの神秘をパック化できず、その価値を低下させかねないのです。最近の技術のため対人のコミュニケーションが豊かになったと確信する人にとっては、ここで主

張していることはどうも腑に落ちないかも知れませんが、その確信自体が問題の病症だと私は考えてきました。ようするに、コミュニケーション技術の大衆化は対人のやり取りの共通基準の最小化を促すとともに、理不尽な側面を一切失わせていくのは当然です。

むろん、コミュニケーションの「神秘」の価値を自覚することが必ずしも思いやりに富み、慈悲深く、人道的であり、その反面、現代技術でのコミュニケーションの内容はすべて表面的、わがまま、道徳抜きであるとはいえません。言語の裏、言語を超えたものは人間の暗い「影」を露わにすることも常に可能です。しかしまさにそのためにコミュニケーションの全ての側面を意識することが必須なのです。

V

トールキンの『指輪物語』の終わり、フロドとサム冒険が終幕に近づくところでサムがいいます。「おらたちはまたなんちゅう話の中にはいつまったこっでしょうね、フロドの旦那？……そしておらたちの出て来るところが終わったあとは話はどうなるんだらうなあ。<sup>10</sup>」これは私がここでしたいと思った質問です。われわれは現代、支配、理解できない物語に大いに取り巻かれていて、その物語をできるかぎり意識しないと、これからの人生の質はどうなるか、次の世代にどういった世界を残すことができるのかと問うことも出来ません。現代の背景にある物語について、科学・技術が形成しているコミュニケーションとその脱神秘化の成果をなるべく詳しく物語らないといけません。われわれを巻き込む物語がどれほど大自然や人間のこころの深みに対する驚異感への悪影響を与えているのかを自覚しな

いと、われわれの出番が終わったあとの話は、ただ進歩の流れに任せてよいと信じてはあまりにも思慮浅く、意識の縮小を促進してしまうことにほかならないでしょう。

恐らく私が話している現代の像は、あたかもレムブラントの景色を三筆で描きあげた墨絵に模写しようとしていると思われるかもしれません。しかし、コミュニケーションの神秘は、豪快で、太い筆でしか描けないのです。とにかく、われわれを巻き込む物語に自覚することはその方向を変えることとはちがいます。洞察の深さの証明はその具体的成果にあります。それは一番難しい課題です。コミュニケーションの神秘的側面を抑制し、その影響を公の領域から取り外すことに対して、単なる個人的努力では足りません。それは現代の制度に深く織り込まれている問題なのです。坐禅の呼吸法が、人が懸命に一息一息吸い込んでいる空気の中にある毒素や公害をはらい清めるに役立たないのと同じように。たとえ神秘性の価値低下が意図的に計画されていなくても、われわれの受動的な協力なしにそれは継続できません。その継続は積極的な肯定ではなく、ただたんに現代の物語を支配している価値観を受け止めて、ただ人間として「現実の世界を生き抜ける」態度を要求します。コミュニケーションの神秘的側面の価値は手にあまり、制御し切れないかのようです。こういった状況の中で個々の人に現代の精神に英雄的抵抗を求められるわけにもいきません。死に対する勇気を要求することが疫病を撲滅するに役立たないのと同じように。

コミュニケーションの神秘性の価値がある特定なときに奪われてしまったのではありません。むしろわれわれが現代を「ありのまま」に抵抗せずに受け入れることによ

って、一刻一刻そのことを許しているのです。言語の行間に気をつけない、言語の裏、言語を超えたものやその背景にある匂いがなくても寂しく思わないことによって、貴重なチャンスを廃棄しています。その結果われわれの言葉は次第に、思わず触れなくなる柔らかい皮膚ではなく、触っても何も感じない堅い外殻になってしまいます。個人としては仕方がない発展です。現実の世界を立ち去らずに、受け止めるしかないわれわれの共通のエートスです。私はこういう問題についてお話ししていると、まるで鰐の口の中に飛んで歯の掃除をする小さなチドリみたいな感じ、怪獣のつまようじにすぎず、その強大な食欲を抑えることに何もできないちっぽけな存在である気がします。けれども、言うべきことは言わざるを得ません。つまり、世界を変更したければ、人はまず個々の世界を見る目を覚まされなければなりません。具体的な応えがあるとすれば、それは見ることも支配することもできないものに対する人間の本来の衝動からわれわれを引き離そうとするものを、意識的にしかも集散的に退けるところにあるでしょう。ようするに手にはいりやすい技術の諸道具を再評価して、選択的に放棄することに他ならないと思います。公の領域においてこのような節度や放棄をすすめる伝統は無力で、多くの場合は天の邪鬼っぽい反社会的態度を要求するのです。私が考えている集散的反応は既成組織や国際運動の形を取らず、単に現代の物語の方向付けに満足していない個々の人の支えあいの形で、新しい習慣を実行しようとする試みだけです。

最近の技術を放棄することはいろいろな面で現代の「進歩」という通念にそむくのです。ここで私が目的にしたのは、現代の

先進国を一斉射撃することではなく、むしろ皆様ひとりひとりに口をきいて、ひとりひとりが自分のコミュニケーションの中で、公で価値も意味もないにしても言語の裏、言語を超えた気持ちをどのように注意するか、どのように処分するのかについて考えるよう誘うところがありました。「もう十分」といえるまでには、どのぐらいの「進歩」をゆるめますか。現代人にとって「ゆるし」はきりがありません。私は一層少ない方をお招きしたいと思っております。

本論は 2004年5月8日に南山大学において行われた日本グループ・ダイナミックス学会の第51回大会での講演である。

## 註

<sup>1</sup> XIX, 475. 松平千秋訳『オデュッセイア』下、岩波文庫、1994年、197頁。

<sup>2</sup> 『鶴見俊輔集』12、筑摩書房、1992年、458頁。

<sup>3</sup> 『世阿弥禅竹』日本思想体系24、岩波書店、1974年、74、86頁。

<sup>4</sup> 『心理学と宗教』村本詔司訳、人文書院、1989年、92頁。

<sup>5</sup> A・カミュ『シシフォスの神話』新潮社1951年、26頁。

<sup>6</sup> 2004年3月5日、東京の外国人記者クラブで行われた講演は *The Daily Yomiuri*, 14 March 2004 に報じられている。

<sup>7</sup> “Disvalue,” *In the Mirror of the Past* (New York: Marion Boyars, 1992), pp. 70–82.

<sup>8</sup> George Steiner, *Real Presences* (London: Faber and Faber, 1989) の冒頭のエッセーを参照。

<sup>9</sup> 「コミュニケーション史上のアメリカ」、『鶴見俊輔集』3: 122頁。

<sup>10</sup> J・R・R・トールキン著『指輪の物語：王の帰還』下、109–10頁。

James W. Heisig  
本研究所第一種研究所員